

# コードルとモーダルについて

ソロを取る時に使われる専門用語です。

「コードル」なアプローチは、コードトーンやそのテンションを軸に音を選びソロを取る手法です。これは、1940～50年代のビバップやハードバップと呼ばれるジャズの特徴の一つです。

「モーダル」なアプローチは、曲のキー(調)に対して音を選びソロを取る手法です。モードジャズなど1960年代以降のジャズでよく使われています。

それぞれを詳しく解説していきます。

## 【コードルなアプローチ】

コード一つひとつに対して適切なスケール(音階)を当てはめて演奏します。

「この機能のこのコードではあのスケールが使えるな」という覚え方も◎ですし、コード理論に強い人は「そのコードに対してどのテンションを入れるか」という考え方でスケールを選択することもできます。

コードが変わるたびにスケールも変わるため、メリハリのあるソロ演奏がしやすいですが、使う音が多くなる分スケールの分析や表現が難しい人も多いです。

Am7 (Aナチュラルマイナースケール)      Dm7 (Dリアンスケール)      G7 (Gミクソリディアンスケール)      Cmaj7 (Cメジャースケール)

コードトーン(CT)      テンション

## 【モーダルなアプローチ】

コード進行というよりはキーで考えるので、多くの小節に対して同じ音使いで演奏する事ができます。

Am7      Dm7      G7      Cmaj7

### 4小節全てCメジャースケール!

上記の進行の場合、キーはCメジャーになります。

この4つのコードは、全てCメジャースケール内の音のみで構成されているからです。

Am7 (ラ、ド、ミ、ソ)      Dm7 (レ、ファ、ラ、ド)  
G7 (ソ、シ、レ、ファ)      Cmaj7 (ド、ミ、ソ、シ)

全てピアノの白鍵のみで弾ける音(Cメジャースケール)です。

このように、「この4小節の間は、Cメジャースケールだけを使っておけば大丈夫」というソロの取り方が「モーダルなアプローチ」です。

曲を大きく捉えて演奏する事が出来るため気持ちに余裕が生まれる、歌うようなソロが取りやすい、というメリットがある一方、ジャズでは頻繁に転調するためその時は別キーのスケールで対応しなければいけない、良くも悪くも浮遊感のあるソロになりがちなのでコード楽器(ピアノ、ベース、ギターなど)が無くなるとロスト(見失うこと)する危険がある、というデメリットもあります。

# まずは気軽にアドリブソロを体感♪

アドリブソロ初級者にとって、コードよりもモーダルの方がシンプルで演奏しやすい場合の方が多いかもしれません。

そこで、1コーラスを通じてほぼ一つのスケールのみで演奏できてしまう曲でアドリブソロを体感してみましょう！

ですが、いきなり「このスケールで適当にアドリブしてみましょう」と言われても困ってしまう人もいらっしゃるかもしれませんね。

今回はもっと噛み砕いて進めていき、「アドリブって難しい」「敷居が高い」というイメージを払拭しましょう！

今回のテーマは「ブルーノートスケール(マイナーの方)」です。

## 【ジャズでよく演奏されるキーのブルーノートスケール】

Fブルーノートスケール (inC)    Gブルーノートスケール (inB♭)    Dブルーノートスケール (inE♭)



Fブルーノートスケール (inC、ハ音記号表記)



4つ目の音が特に特徴的です。「マイナーペンタトニックスケール」にこの4つ目の音(減5度)を足すとブルーノートスケールになります。

ブルーノートスケールは、情緒や憂いある切ない響きを持つアフリカ起源のスケールです。このクセのあるいわゆる「クサイ」音をたっぷり感じてみてください！

練習曲は、

- inCの場合のFブルース(曲数が多すぎるので曲名は省きます)
  - Moanin' (Bobby Timmons)
  - The Chicken (Alfred Ellis)
- などがお勧めです。

※下記、少し理論的なお話をしますが、今は理解していなくても大丈夫です。

ブルーノートスケールは基本的には下記のコードに使用できます(例外もあります)。

- セブンスコード (I7、II7、IV7、V7、VI7)
- トニックのマイナーセブンスコード (Im7、IIIIm7、VIIm7)

上記の曲はこれに当てはまらないコードも出てきますが、強行突破してもそこまでの違和感はないので、アドリブ初級者のうちは全く問題ありません。

また、ブルーノートスケールを使う時はコードトーンやアボイドノート、テンションの事を考える必要はありません。

ソロを演奏するには、  
・どの音を使うか  
・どんなリズムで演奏するか  
が重要です。

更に、  
・どんなニュアンスで表現するか  
・共演者や時にはオーディエンスとの駆け引き  
にも意識を持てるとより充実したソロが取れるようになりますし、熟練してくると次第に音に個性が  
生まれたりアイデンティティや人生観を自然に表現できるようになっていきます。

今回は、いきなりスケール全部を使ってソロを取るのではなく、ソロを取るうえで最も基本となる  
・どの音を使うか  
・どんなリズムで演奏するか  
を理解し表現できるように、音は一つずつ増やし、リズムに関してはモチーフを考えながら進めてい  
きます。

### 【使う音の順番(増やす順番)】

inC

完全1度 完全5度 短7度 短3度 完全4度 減5度

inBb

完全1度 完全5度 短7度 短3度 完全4度 減5度

inEb

完全1度 完全5度 短7度 短3度 完全4度 減5度

inC ^音記号表記

完全1度 完全5度 短7度 短3度 完全4度 減5度

### 【リズムに関して】

#### モチーフ

#### 演奏例

## その他のモチーフ例

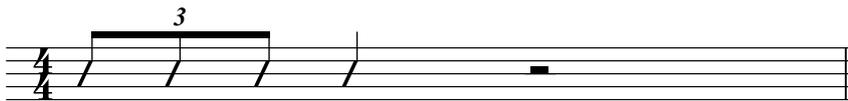
### モチーフ②



### モチーフ③



### モチーフ④



### 【ブラッシュアップ★】

コード的な要素も入れていきましょう！

- サブドミナントのⅡm7、トニックのⅠm7コードをドリアンスケールにしてみましょう
- ドミナントのⅤ7をミクソリディアンスケールにしてみましょう(アボイドは4thです)
- ミクソリディアンスケールのアボイド(4th)を#してリディアン7thに変化させてみましょう

### 【メモ】

Blank musical staves for notes.